



佐伯

胖

Saeiki Yutaka

「わからない」を大切に

「基礎」とは? 「基本」とは?

Vent (以下V) : 音楽科教育において「基礎・基本」の大切さはずっと強調されてきています。しかしながら、どうも言葉が独り歩きしている感が否めないのですが…。

佐伯 : 私は58歳から本格的にフルートを習い始めて今も吹いていますが、何度も何度も一から作り直すことを自らに課しています。ある段階になるとそれまでのものを全部いったん壊す。自分の吹き方、姿勢や呼吸も含めて本当に初めから作り直す。音が出ない状態に自らをおいて、もう一回、音を

出すということを一から考え直して新しく作り直していくという形で、いい音を模索する。基礎とは本来そういう概念だと思うんです。例えば、数学的基礎、つまり数学基礎論というのは、数学の最高峰です。基礎とは、そこからすべてをもう一度作り直す、意味付け直すもになっているものです。学校教育では、まず基礎だからと九九を勉強させますけど、これは基礎の考え方を勘違いさせる非常に怖いことだと思います。基礎というのは、最初にマスターしたら上に行くというようなものではなくて、どの段階においても、初心に戻るといえるか、常に立ち返って

全体を新たにつくり直せる、そういうものなんだ、と自分で楽器をやりながら感じています。

V : 基礎とは、常に戻るべき原点。では、基本というのは?

佐伯 : ある程度の、およそ様になるための筋のようなもの。様になるためにはある程度の基本が必要です。私が最初にフルートを吹いたのは、大学4年の頃でした。そのときはフルートを買って持って行っただけで、まったく音が鳴らなかった。音の出し方も知らな



● さえき・ゆたか

青山学院大学社会情報学部教授。東京大学名誉教授。

慶應義塾大学工学部管理工学科卒業、同大学院工学研究科管理工学専攻修士過程終了、米国ワシントン大学大学院心理学専攻博士課程修了（Ph.D.）。東京理科大学理工学部助教授、東京大学大学院教育研究科教授、同学部長・研究科長を経て、2000年4月に青山学院大学文学部教授となり、2008年4月より同大学社会情報学部教授。2007年4月より青山学院大学ヒューマンイノベーション研究センター長。

専門分野は認知科学、学習学。心理学、言語学、計算機科学、社会学などの総合科学として行われる「認知科学」の普及・発展に尽力している。

主な著書に、『認知科学の方法』、『「学び」を問いつづけて—授業改革の原点』、『学ぶ力』（河合隼雄他共著）、『わかり方』の探求—思索と行動の原点』、『共感—育ち合う保育のなかで』など。

かった。でもそのときにいろいろ教わって、レッスンの最後にかすかな音が出たなあと思っていたら、「今まであなたがやってきたのは『蝶々』ですよ」と先生に言われた。「えー！」と驚きました。確かにそうなのですが、全然気付かずに「レ・シ・シ・ド・ラ・ラ…」と1音1音必死に吹いていて。でもそれがわかった途端に、すらすら吹けてしまったんです。たったの4音で『蝶々』の曲になっている、と気づいたことは、大変なことです。それは意味のあるものをつくることのできる、という感覚ですね。これはどんなことについても同じで、無意味なことではなく、必ず意味のあるものをつくる希望をもつことが基本だと思うんですよ。V：つながっていくということでしょ

うか。それまで別々だったもの、無意識の経験というものが…。

佐伯：そう、方向付けられる。こういう感じが音楽なんだな、と。一見無意味なものをつないでみると、明らかな意味が生じるという経験。どんな道でも、探求し深めていくときの方針、基本的な構え、そういうものがある。これが基本的な考え、基本的なスタンス。V：確かに構えや方向に、基礎的という言葉は使いませんね。

佐伯：「何に向かうか」という方向は非常に大事なことで、それは教わるしかないのです。私がフルートの先生から学んだ基本は「たった4音であってもそれは音楽である」ということ。音楽であると思った瞬間に、部分は単なる「部分」ではなくなる。それが音楽

の基本的な考え方であり、それを求めていくことが重要だと。どんなつながりでも必ずそこに音楽と呼ばれる特性をもたせることができる。ただトントントンとたたくのだって、音楽として行うのと、無意味に行うのでは、同じように見えていても全然違う。そういうことに目覚めることが、音楽をするうえでの基本的な姿勢です。

V：音や要素だけを聴き取ることができても、それが音楽として意味付けられているのと、いないのとでは、まったく違うということですね。

佐伯：音楽を音楽として聴き、奏でるという基本をやはり伝えてほしいですね。部分部分を焦点化するのではなくて。あるまとまりが合わさって、また別のまとまりになる、というような意識や感覚をぜひ育ててほしいと思います。

「知覚」の意味するもの

V：学力や評価と結び付けて、鑑賞などを通して、分析的に要素を聴き取ることが音楽がわかることにつながるという意識が、実践現場に広まっているような印象があります。

佐伯：それは大変な間違いだと思います。認知心理学で何が一番変わったかという、統合による分析であり、分析から統合ではない。統合を志したときに部分が分析される。それを求めたときに部分が部分として見えてくる。基本的にはそれが革命なんです。

考えてみれば、言語というのは、ある程度先に予測するから、一つ一つの音が聞こえてくるんです。同じ音素でも別の単語の中に入ると、違う音に聞こえてしまいます。それは実験すればわかることです。つまり、部分はまったく同じなのに、受け取る側には違う音として聞こえる。そういうことがあらゆる認識の基本になっている。そういう感覚を音楽で磨くには、常に全体が何を訴えているのか、どんなまとまりとして捉えられるのか、ということ

に対する関心を高めることを優先しないといけない。

V: パーツだけに目がいくと…。

佐伯: 壊してしまいますよね、本来のものを。

V: 要素等の「知覚」ということが、音楽科で前面に出てきていますが…。

佐伯: 「知覚」という言葉は、私もアメリカで大学院へ行って知覚心理学を勉強するまでわかりませんでした。知覚とは、単に受容することだと思っていたのです。ところが「perception」というのは、受容してきちんと脳の奥に意味として把握されるまでのことだっているんですね。「知覚」というものが、与えられた刺激を受容するものだ、という考えは、根本的に違っているのです。

V: 反射的に、反応的に事象を聴き取るのが知覚ではない、ということですか？

佐伯: どんなものを触っても、何であるかということを抜きにして触ることではない。触覚を刺激されているというだけでは、触ったことにはならない。「知覚」とは、それがどういうことなのか、何なのか、という「意味づくり(sense-making)」のところまでいく、そこまで全部が一体となって含まれているということが、理解されていません。心理学では当たり前のことなのですが、「知覚」は受容ではなく、きちんと積極的に最後まで自分なりの意味付けをすることまで含んでいるものなのです。

「主人公化」の大切さ

V: 近年の学力観、評価観の流れをどのように捉えていらっしゃいますか？

佐伯: 何回も問い直されているので、かなりよくなってきていると思います。幸か不幸か数年前に国際学力PISAが少し低下したということで、それで慌ててフィンランドなどに行き、そこから学力観が少し変わりましたね。今までのように、教えたことが再現できる

か、ということで学力を測ることは、少なくとももうない。それはもう1970年代の話です。自分自身がいろいろなところで、さまざまな問題を解決できるようになる、という捉え方が、だんだん広まってきていると思います。もう少し言うと、学力を個人の私有財産のように捉えることも、少しずつなくなってきています。学び合うとか、状況的な学習、学びの共同体論とか。そこが'90年代からの大きな変革ですね。いろいろな人と関わることを通して生まれてくるもの、共同的に出し合う、あるいは共同的に可視化される、つまり「主人公化」されるということが大切になってきています。

V: 主人公ですか？

佐伯: どんなときでも何かにに関して、この人はこのことについて主人公になることができる。その人の内側から出てくるものを、みんながおもしろい、よい、というふうに「appreciate(よさを評価)」する。そういう期待と援助の中で、その人が、その内側から出てくるものを周りの人と共有し、よいものを出すことができるということを能力と呼ぶならば、すべての人はみんな何らかの能力をもっていて、周りの人が主人公化することから発揮されるということです。

V: そのもとに「共感」もある、と。

佐伯: そうですね。その人なりに、何か知られざるものをもっていて、それを引き出すことで新しいことが生まれるという期待をもって、相手と関わることです。感情移入は、相手側に感情を移入することです。でも、共感はどうかがこちらに乗り移ってくる。相手が今までの自分と違うものを示している、それを徹底的、全面的に受け入れようとするときに、私たちは向こう側に立つんです。向こう岸からこちらを見る。そういうものなんです。あちらからこちらをみることで、こちらからあちらを見るものではない。

V: 「相手の立場に立つ」「学習者の立



場に立つ」などと言いながら、実のところそれはあくまでも自分だったらこうだ、というようなことに陥りやすいのでしょうか…。

佐伯: 自分の目から学習者を想定して、そうなんだろうと考えているにすぎない。昔の自分になって見ているだけなんですね。そこからなかなか抜け出せずに、自分が学んできた姿を重ねてしまうんです。教える側が、自分たちのしてきたものと異なる方法を発想できなくて、さまざまな分野で弊害が生まれているのではないですか？

V: 耳が痛いお言葉です(苦笑)。

佐伯: でもそれは本来の共感にはならない。自己本位の「共感幻想」です。

V: 先生は、共感と同感でもない、と書いていらっしゃる。

佐伯: 同感とは、今言った共感幻想のようなもので、自分とあなたは同じだよ、という想定を一生懸命広げていく。よくやってしまうことなんです。

V: とところで、最近では、言語活動の充実から、音楽科の授業でも話し合いの部分が増えているようですが…。

佐伯: 音楽の場合、どうしても言葉で説明できないものがあります。そうした世界を、あたかも言葉で全部説明できるかのように想定した議論になるのは怖いことだと思います。そうすると結局、要素的な判断や評価とか、そういうところになってしまう。

V: 手がかりがそれしなくなっ

まいますから。

佐伯：もっともらしく意味付けできるものに、すぐ飛びついてしまう。そういうことに振り回されていることが問題なんですね。

ずいぶん前になりますが、東大にいた頃、教育学科の学生たちが1週間ぐらい小学校を借りて授業をしたんですよ。私ももちろん授業をする。そのときちょうどディベートが流行し始めた時期で、木下順二の『あとかくしの雪』でディベートの授業をしたいという学生がいました。それで「大根を盗む。これはよいことか悪いことかを2班に分かれて議論する」という計画を出したんです。稲垣忠彦先生^(※注)はこれに対して、顔を真っ赤にして怒られたんです、それは違う、と。そこで私たちが感じ取るべきものはストーリーの全体であり、そのストーリーの中で人々のいろいろな葛藤や想いを豊かに感じ

合っていく、そのことが最も大事なものであって、大根を盗むのがよいか悪いかを議論するのは全然違うと。そう言われたとき、すごいことだと思いました。それはまさに私が言っていることと同じだったからです。鑑賞する、味わうということは、どこそこがどうなんだと理屈で詰めることではなくて、描き出された世界にまず自分自身を置いてみる。その中で矛盾や悩み、葛藤をなくそうとするのではなくて、それらのすべてを抱えながら生きていくということを味わい、静かにその世界に浸る。それができなければ、文学を読むということとはできない。音楽も同じでしょう。そういう意味では、妙に言葉達者な表現であれこれと言い換えたりするものではないでしょうね。これは美術の鑑賞も同じです。子どもたちに絵を見せて、盛り上がっておもしろおかしく行う授業もありますが、じっ

とたたずんで味わうことも大切です。これもある小学校で実際にあったことなのですが、一人一人が描いた絵を黒板に並べて、批評し合う。その絵の色使いはどうかと言合うという話を聞いたときに、それはおかしい、と。この1つの絵を見たら、少なくとも数分は黙って見なさい、と。秋という題でみんなが絵を描いているので、絵の中の木の根っここのところに積もっている落ち葉の中で、虫になった気持ちでもぞもぞ動いてみる、そして何か言いたくなったら言う。あるいは、木のてっぺんにいる鳥になったつもりで「カー！」と鳴いてみる、そして何か思いついたら発言する。そういうふうに行いました。

V：芸術教科にとって根本的なことですね。ところが、[共通事項]をどう指導するかとか、言語活動の充実に向けて各教科でどう対応するかとなると、どうしても音楽の諸要素やそれに類する言葉に、先生方の意識が行ってしまうようです。

佐伯：それは、はっきり言って直さなければいけない。あなたがもしこの絵の中の世界に入ったときに、虫や蝶々になってみて、何か自然と自分の内側が動いたら、そのことを語ってごらん。そういう捉え方をぜひ強調していただきたいですね。

V：イメージというものは、どこかに固定されたものとしてあるのではなく、相互から誘発されて出てくるもので、そういう場をつくっていかねばならない、と先生はおっしゃっていますね。音楽作品のイメージや、その作品から受ける感動というものも、同様に考えればよいのでしょうか？

佐伯：どんな場合でもイメージや感動は、こちらの心構えと作品との相互作用によって生まれます。対象そのものがもっている属性を指摘してどうのというものではなくて、自分との対話の世界なのです。自分自身がそのときの経験によって多様に変わっていくわけ



だから、そのとき何がすばらしく見え
たか、聴こえたか、ということはある
ますが、そういうものを対象のもつ属
性として語るのではなく、そこでの「経
験」を語り合う。それは時々に出合う
もので、ものすごく感動することあり
ます。だからといってその作品が常
に同じ感動をもたらすのかというと、
それはそうでもあるし、そうでもない
のです。状況と人々の期待、それらの
相互作用によって生まれる経験ですか
ら。大切なのは、いろいろな捉え方
があるけれど、そう捉えてもいいんだ、
それは意外だったな、そういう発見を
楽しむことです。

V: それが先ほどの「主人公化」なん
ですね。

佐伯: そうなんです。だから、「君、
そういうことならきちんとできるよ、
やってごらん」と、主人公化できると
ころを発見することが評価。予想した
ものに当てはまるかという評価とは、
およそかけ離れているわけです。いわ
ゆる点数的評価、基準点をクリアした
かどうかを見るという評価が、あまり
にも行き渡り過ぎていて、世の中を暗
くしていますね。「なるほど、それは
いいなあ！」という感じを共有し合え
るのが評価だと思います。それは共同
作業なんです。「これどういう意味？
よくわからないけど説明して？」と聞
いているうちに、「なるほど」と意外
な発見をする。そこで初めて評価す
ることになる。評価というものを、新
しいよさの発見というふうに捉えてほ
しい。これはものすごく基本的なこと
です。常によさを探す。私はアメリカ
はずいぶんお世辞を言われて、彼ら
はお世辞がうまいなあと思っていま
したが、彼らは人のよいところを見つ
けて、それを口にするんですよ。「それ
はいい考えだね！おもしろいね！」と。
そういう文化があるんです。

V: モチベーションが高まりますね。
先生は、評価は人間にしかできないも
のなのに、評価が独り歩きすると、ど



こかで機械的にマニュアル化してしま
うと書かれていました。

佐伯: そう、それは間違いなんだけ
どね。

悩むことから問い直し、 わかり直しへ

V: 最後に、「音楽がわかる」とはど
ういうことなのかお伺いしたいので
す。

佐伯: 「わかる」というと、まずわ
かるべきことがあって、それを納得で
きるかというふうになってしまうけれど、
「音楽がわかる」ということは、音楽
によって自分の中から豊かなものが生
まれてくることであって、受け止める

ことではないということです。ああ、
こういうことだったのかということが、
正しいだとか真理なんだとかいうの
ではなく、気持ちが沸き起こってくる
ことによって新しい世界が広がるとか、
今までの自分とは何かが変わった感
じがするという、非常に創造的な活動
だと思います。

V: では、わかろうとしている子ども
たちにひと言メッセージを！

佐伯: 「もっと悩め！」ということ。
わかったと思ってはいけない！もう一
度わかり直すために、わからないとい
うことを恐れず、わからない世界を大
事にしてほしい。「ああ、こうだ！」と、
急いで答えを求め過ぎているから、「わ
からないなあ」と悩んでほしいんです。

V: 悩むとは、問い直すことですか？

佐伯: そうです、悩むとは「わから
ないなあ」と思うことです。

V: 先生は、時代に即した教育をする
のではなくて、今の時代をこう変えな
くてもいけない、こういうことをして
いかなければいけないから教育があ
るんだと何回も書いていらっしゃいます。

佐伯: 教育というものは、何か新しい
ものをつくり出そうとするものでな
ければいけない。いわゆる伝達と再生
産ということになってしまったら恐ろ
しいことです。

V: 肝に銘じたいと思います。長い時
間どうもありがとうございました。

※注：稲垣忠彦（1932-2011）東京大学
名誉教授。教育方法、授業実践、教師教育な
どを研究され、信濃教育会教育研究所所長を
務められたが、本年8月18日逝去。

Information

BOOK



『学びを問いつづけて —授業改革の原点』

教育の原点について、著者
が20年にわたってさまざま
な場所で執筆してきたエ
ッセイ等を収録。(小学館)



『共感 —育ち合う保育のなかで』

子ども、保育者、保護者が、
保育を通して互いに「共感」
し合い、大切に育むことを
訴える。(ミネルヴァ書房)

授業者に訊く ②

中学校は佐賀県の西部に位置する伊万里市を訪ねました。
2年生が新しい歌唱教材『unlimited(アンリミテッド)』に取り組みます。
歌詞や音符に込められた思いをクラス全員で共有し、歌声に生かすために、
体全体で感じながら学習活動を展開していました。

授業者：松尾洋子

伊万里市立啓成中学校

本時の授業の位置付け

今回の歌唱指導は、卒業式に向けて心の伝わる(心のこもった)声で歌うための授業です。これまでにも合唱コンクールなどを通して歌唱活動に取り組んできましたが、美しい響きで歌うことや、歌詞を理解しそれを伝えるような合唱に高めるところまでは至りませんでした。今回、より深みのある合唱を目指して次の3点を軸に学習活動を行います。

- ①気持ちを伝えることのできる歌声(発声)の習得。
- ②作詞者、作曲者の思いを自分(クラス全員)の思いとリンクさせる学習。
- ③音符や休符がどういう意味をもつのか学習し、歌唱に生かす。

卒業式では2年生として在校生の思いを歌で伝え、卒業生とともに感動を分かち合えるような合唱にしたいと考えています。さらに、

- ・一人一人に目を配り、発声を基本からじっくり学ばせる。
- ・よい響きの中で歌うことの喜び(一体感)を感じ取らせる。
- ・歌詞からのイメージ、音符にこめられた思いをクラス全員で見つけ出し、確認し合いながらいっしょに音楽(曲想)をつくる喜びを感じ取らせる。

以上3点を目標にしながら、特に「言葉」にこだわって授業を進めます。歌詞の中にある空間、思い、願いをクラス全員で共有するとともに、歌詞の内容を理解し、心でイメージしながら歌うことで、実際に歌声が変化することを体験します。

授業の流れ

	○学習内容 ・学習活動	○活動の意義 ・留意点
導入	○のびのびと歌う楽しさを感じながら声を出す。 ・「校歌」を歌う ○前時の授業を振り返り、本時の目標を確認する。 ・声を出すための体、空気の流れについて ・『unlimited』の下パートの音の確認	○毎時間「校歌」を歌うことから始める。音楽の授業に入るのだという気持ちの切り替えと、クラス全員で声を出す楽しさを感じてほしいというねらいで行う。 ○体を柔らかくする運動や声帯のマッサージを行い、無理のない柔らかい声を出すために準備をする。 ○体の構え「頭頂部、丹田、気柱、目線、足」を常に確認しながら、空気の流れを意識して発声する。
展開	○曲想づくりをする。 ・言葉(子音)をたてる ・言葉のイメージを声に生かす ・言葉のイメージとリズムのおもしろさを生かす ・長くのばす音の中にある気持ちを感じ取り、声に生かす	○基本は、生徒の歌声を聞きながら言葉のイメージが足りない部分、もっと歌詞を感じて歌ってほしい部分を投げかけ、曲想づくりを行うようにする。イメージしたことが次の視点で生かされるようにする。 ・子音 ・音色 ・音価 ・音の方向と息のスピード
まとめ	○本時の自己反省をプラスイメージ(出来るようになったこと)で行い、次回の課題をもつ。	○この時間に何か一つでも上達した自分を認め、次の授業への意欲につながるよう、言葉をかける。

言葉や楽譜へのこだわりから イメージを育てる

聞き手
佐藤真実子
(広島市立伴中学校教諭)

校歌によって培われるもの

佐藤：とてもすなおな生徒たちですね。

松尾：私は昨年赴任したばかりで、彼らが小学生のときに、隣の小学校で3年生から6年生まで教えていました。違う学校から来ている生徒もありますが、みんなとてもすなおな子どもたちです。

佐藤：どの学年も授業の始めに校歌を歌っていらっしゃるのですか？

松尾：歌唱や合唱の授業では、どの学年でもまず校歌を歌うことから始めます。

佐藤：校歌は学校への帰属意識を育てますし、大事だと理解していますが、私の場合は式の前に慌てて練習させることが多く、ふだんはあまり歌わせていません。

松尾：啓成中学校では、生徒会が中心

になって毎日帰りの放送を行います、そのとき必ず校歌を歌います。廊下のほうを向いてどのクラスも毎日。そのおかげで校歌はかなり身につけていると思います。

佐藤：そうだったんですか。余談ですが、私の勤務校では校歌が短調なんです。生徒は意外に楽しんで歌っているようで、付点のリズムが続くからか、腕を振って歌っている生徒もいます。校歌を授業の始めに歌うのもいいな、と思いながらも、あの校歌を毎時間歌うのは…と思って（笑）。

松尾：珍しいですね。悲しい感じですか？

佐藤：いいえ、平和の旗をあおぐとか、若人が平和を築いていかなければいけない、という内容です。ところで、校

歌を歌うことによって生徒たちが音楽的な内容に関して、何かを学び取っていると感じられますか？

松尾：本校の校歌は、もともとメロディーや伴奏に魅力があり、歌詞も1番から3番までそれぞれ内容に変化があって、情景を思い浮かべやすい曲です。それで私は歌詞の情景に合わせ、1番は元気に、2番ではレガートを意識するなど、伴奏の雰囲気を変化させて弾いています。ピアノの音の雰囲気の違いに、生徒は敏感に反応します。ただ単に発声練習として歌わせるだけではなく、歌唱表現を工夫させるためにも活用しています。

言葉とのかかわり、楽譜への こだわりが音楽を深める

佐藤：言葉にこだわることについては、今日の歌唱の授業に関して特に意識されたテーマなんでしょうか？

松尾：今日に限らず毎回です。歌詞は作詞者の思いや、よりすぐった言葉が集まったものなので、特に大事にしています。次の合唱コンクールのとき、どんな視点で自分たちの曲に仕上げていけばいいのかという参考にもなります。例えば、「あのとき、子音に気をつけたな」とか、「“つばさ”は白のつばさにしたな」とか…たぶん何人かは覚えていると思うので、それをもとに自分たちで生かしてくれるといいと思います。いながら指導しています。



佐藤：参観の資料としていただいた『unlimited (アンリミテッド)』の楽譜には、たくさんの書き込みをされていていらっしゃいますね。教材研究の深さに驚かされますが、これはどの段階で書き込まれるのですか？

松尾：これは指導しようと考えた段階で書き込みました。

佐藤：実際に生徒たちが歌う前なのですね！

松尾：そうです。例えば、“未来の地図広げて”のところ、「地図はどこにあるの？」と聞くと「心の中！」と言う生徒がいたり、「大きさは？」と聞くと「大空いっぱい」などという答えが返ってきたりします。ではそんなイメージでその地図を広げてみよう、みんな上体を広げて歌ってみよう…。そうすると、断然よく歌えるんです。そんなやり取りを想定しながら、あらかじめ楽曲分析をしています。

佐藤：歌い方が変わってきて、すごいと思いました。生徒も先生の書き込み入りの楽譜で歌っているのですか？

松尾：いえ、この楽譜は私だけしか使いません。楽譜に書かれた歌詞でも、点や「」をつけて意識することによって、表現がまったく違ってきます。例えば「ぼく」と「きみ」を歌うときにも、しっかりした自分は「ぼく」と、明るい「きみ」を具体的にイメージすることで、広がりのある歌声に変わります。イメージすることで歌声が変わるということを伝えていきたいと思っています。

佐藤：そういうところで思考力も養わ



松尾先生が書き込んだ『unlimited』の楽譜

れているのですね。考えることが楽しい、もっと探そう、という動きが見て取れました。イメージは人それぞれ違うので、それを一つにするのは難しいと思いながら自分では授業をしてきましたが、今日の授業を拝見して、いろいろな例を出し合いながら「こうかな」「どうかなあ」とみんなのイメージが膨らんでいき、それを先生が一つにまとめていかれるところがすごい、と思いました。ところで、『unlimited』は何時間で仕上げる予定ですか？

松尾：2時間ぐらいで音を取って、あとは合わせます。卒業式では1年生が上のパートを、2年生が下のパートを歌います。歌詞が卒業生へのはなむけとしていいですね。別れやありがとうという気持ちを歌ったもの、また、しっとりしたものがいいのか迷いましたが、思い切って勇気と希望を与える

曲にしました。

体でまるごと感じながら

佐藤：発声のときには、声の響きを生徒に体で感じさせながら指導をされていました。

松尾：くるぶしの内側の骨と、膝の内側の骨を付けさせたり、また、「天井に頭のてっぺんが付くように」と声をかけたりします。付くわけではないのですが(笑)。でも、そう言うときとさっと伸びるんですよ。息を入れてすばんと声を出させます。面接や卒業式のときでも「みんな付けて」と言うので、音楽の授業で言われているのですぐに揃います。

佐藤：「気柱」を伸ばせ」という指示も分かるのですね。

松尾：「気柱」と言うとき体を伸ばします。指示も減らすことができます。「背筋



●まつお・ようこ
伊万里市立啓成中学校教諭

を伸ばして」とか「気をつけ!」と言うと、体が反ってしまうので息が入らないし、反対に体を曲げて入りません。

佐藤：また、音価のことを「音の命」とおっしゃっていたのが、すごくいいなと思いました。

松尾：私自身がそう習ったんです。音の命だと。

佐藤：生徒からも「命」という言い方が出ていましたし、音を「色」などにたとえるのは聞きますが、「命」なんです。

松尾：そうすると、勝手に縮めてはいけないことがよく伝わるようです。特に1年生はすなおに受け止めるようで、楽譜上の音の長さを理解するようになりました。

佐藤：「6つ（6拍）のばさなくてはいい」ではなく、大事にのばすよう

になりますよね。

松尾：ほんとうは長くのばす音にこそ気持ちをこめなければいけない、ということ指導したいのです。音の長さの中にどのように気持ちをこめていけばよいのか生徒といっしょに考えたい、と思っていますが、なかなかそこまでは至りません。

クラスみんなが響き合う

佐藤：合唱の授業をしていると、子どもたちは歌うことに必死になってしまって、ちゃんとハモっているかとか、響きや発音がどうだったのか分からずに、ただ歌ってストレス解消しているかのように見える、というのが悩みです。

松尾：3年生の『仰げば尊し』を指導したときに実感したのですが、アルトとバスを抜き出し、男声の上に女声をのせてみて、それがきちんとした響きになり、みんなが感動したんです。それで、たくさんほめてから次の段階に進みました。そこでは、響きが例えば「平和」なのか「不安」なのか、それと歌詞がどうマッチしているのかを考えていきました。子どもたちにそうした感覚があれば、最初から全員で歌ってもきちんとハモるものです。以前は、「男子歌って!」「はい、女子歌って!」と歌わせることだけに精いっぱい、生徒たちも、他のパートを聴く余裕がありませんでした。曲のある部分を抜き出して、音の上にのせていく、近寄っていくという感覚を覚えると、合唱が楽しいと思えるようですね。

佐藤：実際にそうした経験を重ねていくと、他でもそういうものを探そうようになっていきますね。

松尾：1学期はしつづけに終わり、2学期の合唱コンクールでは順位がつくので、みんな必死に歌います。一生懸命歌うので気持ちは伝わってきますが、心に響くような声がつくれていないので、「これでは楽しさや豊かさは分からない」と反省をしました。3年生になると市の合唱大会があるので、特に2年生はホールに響く声をつくろうと、一からやり直しました。1月からです。

佐藤：1月からで、無理のない響く声がつくれるのですか!?

松尾：とにかくチャレンジしてみようと、一人一人指導しました。20秒ずつ、「m—」や「Hum」などハミングで。「合格」とする声が出るまで、根気強く子どもたちを見ました。そうしていくうちに、響きの感覚が分かってきたようです。どんな子どもでも粘り強く向き合えば伸びるんだなと思いました。

佐藤：1クラスに何時間ぐらいかけた



●立石琢磨 先生
伊万里市立啓成中学校校長

のですか？

松尾：授業中、毎回15分ぐらいかけてテスト形式で取り入れました。そこで落ちてしまっても、昼休みに再チャレンジできるようにしたのです。そういう態勢で指導したので、何時間もかかっていないと思います。

佐藤：歌の練習をするときに、生徒たちが意欲的でも「あー！」というような喉声で歌ってしまったり、とても残念に思っていました。やはり、おおぜいの生徒の響きをよくするような、ちょっとしたポイントがあるのでよね。

松尾：諦めずに1人ずつでもできるようにしていくことが大切だと思います。みんなで歌えばもっとまろやかな声になる、ということを生徒自身が耳で聴いてだんだんと分かってくるようです。授業後の学習カードにも、「喉が痛くなくて楽だった」「楽に声が出る方法が分かってきた」などと書かれていて、この子たちもそういう声で歌いたいんだな、そういう気持ちがあるんだなと思いました。

佐藤：曲種に応じた発声というのがありますが、この歌にはこういう声がいいと生徒が身をもって認識していくのですね。

松尾：歌ってもきつくないのでしょう。がんばらなくても声が出るので、楽なんだと思います。

〔共通事項〕によって
変わるもの・変わらないもの

佐藤：話題は変わりますが、〔共通事項〕

によって指導内容や方法が変わってきたということはありますか？

松尾：結局、言葉を大切にすることにつながっていますから、変わらないと思います。例えば、*mf*とは何かを学ぶときでも、通り一遍の説明を覚えるのではなく、音楽を通して具体的なイメージに置き換えて伝えるようにしています。また、リズムや旋律についても、歌詞を朗読したり、日本語らしく言葉をきれいに発音したりすることを通して捉えさせることが多いですね。

佐藤：徹底して「言葉」なのですね。

松尾：楽典を暗記するような覚え方ではなく、子どもたちが自分たちのイメージを通して音楽の要素について理解してほしいし、またそうしたイメージを子どもたちから引き出したいと思っています。

佐藤：「言語活動の充実」は日常の学習のあらゆる場面にあるのですね。生徒一人一人に目を向けていく難しさや、評価への課題などはありますか？

松尾：1年生は人数が少ないので、一人一人に歌詞のイメージを聞きます。例えば「白といえど」「——」、「心といえど」「——」、などと思ったことを一人一人言えるようなやり取りを工夫していますし、1人ずつ、少しでもいいから歌わせて声を聴くように心がけています。2年生は人数が多く、1人ずつ声がかけにくいので、ファイルを見てどう思っているのかを知ったり、発言したような生徒を指したり、そういったところで確認するしかありませんね。



●さとう・まみこ
広島市立伴中学校教諭

佐藤：今日の松尾先生の授業を参観して、教師がエネルギーをもっていないと、一人一人を生かすことはほんとうに難しいと思いました。

松尾：誰でもほめられると、うれしいものです。「次もがんばるぞ！」という気持ちになりますし。一人一人のよさをなるべくクラスで共感し合えるような雰囲気になりたいと思っています。それから、生徒たちとサインを決めてあるんです。私と目が合ったらどうするかといったことや、「OK!」「すごい!」ということをや野球のブロックサインのように表現します。ここを触ったら「気柱を伸ばして!」とか、「頬を上げて」というものもあります。言葉だけでなく、サインの交換でコミュニケーションを図ることにも、とても手ごたえを感じますね。



特集

2011年夏 仙台市からの

平成23年3月11日の東日本大震災は、東北地方の太平洋沿岸の地域に大きな被害を、また多くの人々の心に深い傷あとを残しました。あらためて、被災された皆様にお見舞い申し上げます。

本来であれば8月1日、第35回全日本合唱教育研究会（以下、合唱研）全国大会仙台市大会が開催されるはずでしたが、会場に予定されていた仙台市民会館をはじめ、他の会場の使用が困難になったため、大会事務局は全国大会中止の判断を余儀なくされました。

しかし全国大会が予定されていた同日、先生方の結束により、合唱をテーマにした研修会の開催が実現しました。

ヴァンでは、当日会場となった仙台市立荒巻小学校と仙台市立台原中学校を訪ね、各研修会を参観させていただきました。小学校はヴァン編集部より、中学校は東京藝術大学の佐野靖先生より参観レポートをお届けいたします。



研修会レポート



小学校部会

発声法・児童合唱指導法研修会

日時 平成23年8月1日(月)

会場 仙台市立荒巻小学校 体育館および音楽室

内容

第1部 9:30-10:45	作曲者による新曲指導	モデル合唱団：仙台市立南材木町小学校 指導者：尾形裕子(教諭) 講師：若松 欽(作曲家) 新曲：『かけがえのないこと』
第2部 11:00-12:15	作曲者による新曲指導	モデル合唱団：仙台市立金剛沢小学校 指導者：大槻葉子(教諭) 講師：鈴木輝昭(作曲家) 新曲：『明るい空の下で』
第3部 13:30-16:30	小学校合唱指導講習 ①と②のいずれかを選択	①学級担任対象 講師：室屋尚子(神戸市立住吉小学校教諭) ②合唱指導者対象 講師：藤原規生(合唱指揮者)

(表中 敬称略)

思いを歌にするために

会場である荒巻小学校の体育館に到着してまず驚いたのは、広い体育館のフロアを埋め尽くす椅子に空席がほとんどないこと。第1部の若松欽先生による「新曲指導」の前に、宮城県音楽教育研究教育協議会会長の大谷義昭先生にお話を伺うことができた。

「『杜の都の 詩と調べ』を大会テーマにした合唱研全国大会が開催できず、とても悔しく残念です。でも、震災によって、音楽はコミュニケーションなんだとあらためて強く感じています。」

子どもたちは仲間とハモったり、聴く人に伝えたりする喜びだけでなく、自分の存在や相手の存在についても、音楽を通して感じているのではないかと話す。約400名の先生方が集まって研修を行う背景には、そうした音楽がもつ力を感じながら、より指導を深めていくことを目指す姿勢があるからではないかと感じた。

『かけがえのないこと』 ～クラス合唱の新曲として

まず、仙台市立南材木町小学校の児童によって、若松欽先生の新曲『かけ

がえのないこと』が演奏される。若松先生は、震災のことが念頭を離れず、会場に到着するまで実際に子どもたちが歌ってくれるとは思っていなかったと話し始め、子どもたちには「こんなに上手に歌ってくれてありがとう。特に指導の必要もないので、僕はもう帰ってもいいかな？」と笑わせた。舞台上の児童とともに会場の参加者にもいっしょに歌いましょう、と呼びかけ進行していく。

言葉とフレーズの関係、アルトパートの役割、付点音符を歌うときの具体的なニュアンス等々がテンポよく説明される。特に、ピアノの前奏についての楽譜上では表現しにくい微妙なイメージや、歌の1番と2番の同じ箇所が強弱を変えている理由など、作曲者から興味深い解説を聞くことができることは、「新曲指導」ならではの内容であろう。参加者の熱心な歌声からは、作品全体の魅力を吸収し、実際の指導に少しでも役立たせたいという思いが伝わってきた。この作品を仕上げようとしていた時期に震災が起ころ、しばらくは作曲に取り組めなかったこと、

そこから再スタートできるようになるまでの思いを若松先生が直接語られたことも、とても印象に残った。

「心が傷ついたときに、音楽によって癒されるのが大人だとしたら、音楽によって元気づけられるのが子どもたちではないでしょうか。」

仙台市小学校教育研究会音楽部会会長の村山和枝先生はそう話す。

「音楽によって勇気づけられたことを、全国の先生方にぜひ伝えてください。」同時に、仙台市の先生方の熱意によって研修会が開催できたことへの喜びと感謝が伝わってきた。

『明るい空の下で』 ～演奏会やコンクールでの 演奏に向けて

第2部、仙台市出身の作曲家、鈴木輝昭先生による児童合唱の新曲『明るい空の下で』のモデル合唱団として舞台に立ったのは、仙台市立金剛沢小学



若松 歓先生

校。タイトルのとおり、明るい子どもたちの歌声が会場に響く。

子どもたちの演奏を部分ごとに分けながら、楽譜と照らし合わせて丁寧な指導と解説が展開される。音楽には構造があるということや、エネルギーの配分などを力学にたとえた少々難解な説明に対しても、熱心に耳が傾けられた。中でも、言葉のイントネーションとメロディーの関係について「詩のすべての言葉を書き出し、イントネーションのグラフを作成してから作曲する」という作曲者のコメントには、参加者の注意が一段と高まった。

質疑応答の場面では「強弱記号など記譜されている内容を、どう解釈し、表現に結び付けていけばよいのか」という質問に対し、「楽譜は、たとえばいうならば、この曲はこんな顔をしています、というもの。楽譜に書いてあるのは最低限のことであって、それをよりよくする表現の工夫とは、お化粧をしていくようなことではないかと思う」と応じるなど、鈴木先生は楽譜の読み方、本当の再生（表現）を求めることの大切さを力説する。

二部合唱とはいえ、一聴して実際演奏するには難しかったのではないかと想像し、指導した大槻葉子先生に感想を伺った。

「子どもたちは、ピアノと歌の絡みをととてもおもしろがりました。立体的、感覚的に音楽をつくっていくことへの興味を覚えたのではないのでしょうか。」

『かけがえないこと』『明るい空の下で』は、それぞれクラス合唱や演奏会など多くの場面で今後歌われるであろう魅力的な新曲。どちらの内容においても熱心にメモを取りながら参加する先生方と、明るい表情でいきいきと合唱していた子どもたちが印象に残る、爽やかな「新曲指導」であった。若松歓、鈴木輝昭両先生の個性が存分に発揮され、充実した内容となったこともすばらしい。

第3部は、合唱指導講習として、学級担任・合唱指導者それぞれを対象とした講座に分かれた内容。

学級担任対象の講師は、神戸市立住吉小学校教諭の室屋尚子先生。とにかくさんの教材を会場全員で歌いながら、その教材の魅力や指導に適したポイントを紹介していく。若松歓先生の曲を歌う場面では、若松先生が飛び入りで解説を加え、おおいに盛り上がった。また、発声の大事なポイントについて、会場の先生方を参加させなが

鈴木輝昭先生



ら説明するなど、とても分かりやすく共感と呼んでいた。

音楽室で行われた合唱指導者対象の講座は、新進気鋭の合唱指揮者である藤原規生先生が講師を務めた。同じ詩による2つの合唱作品として、谷川俊太郎による『じゃあね』の大熊崇子と相澤直人の作曲という2つのヴァージョンを用いて、言葉とメロディーの関係や表現の工夫を探るなど、興味深い内容によって進められた。

小学校の研修会を通じて感じたのは、とにかく参加者が多く、熱のこもった活気にあふれていたことである。震災の影響を問うと、「震災直後は、歌っていいのか、ととまどう子どももいた」という声や、「子どもの心をほぐし、



室屋尚子先生と若松先生

歌える喜びを分かち合えて音楽の力を感じた」といった声を聞くことができた。また、子どもたちの歌声を聴いて涙する保護者たちにも背中を押されたという。

講師の室屋先生は阪神淡路大震災を経験しており、特別な思いで仙台に足を運ばれた。

「子どもたちが明るく元気になること。その立役者となるのが教師。歌で伝えるためには、気持ちだけではだめ。そのために私たち教師が学んでいくことが重要なのです」

小学校の研修会は、この言葉に象徴されるような充実した内容であったと思う。

中学校部会

第43回宮城県音楽教育研修会

音楽実技講習会(NHK全国学校音楽コンクール課題曲を含む)

仙台市中学校合唱指導研修会

日時 平成23年8月1日(月)

会場 仙台市立台原中学校 多目的ホール

内容 「合唱の総合的な実技指導」

第1部 9:30-12:30	作曲者による新曲指導	モデル合唱団：仙台市内4つの中学校(八乙女中学校、将監中学校、桜丘中学校、広瀬中学校)合同による合唱団 講師：大熊崇子(作曲家) 新曲：『生きる』
第2部 13:30-16:30	平成23年度NHK全国学校音楽コンクール中学校の部 課題曲『証 ^{あかし} 』の指導	モデル合唱団：仙台市内5つの中学校(五橋中学校、長町中学校、八軒中学校、富沢中学校、第一中学校)合同による合唱団 講師：武田雅博(合唱指揮者)

(表中 敬称略)

研修会に学んで

開会にあたっての仙台市中学校教育研究会音楽部会長、澁谷代志子先生のご挨拶は、簡潔な言葉の中にも、東日本大震災以降の仙台市中音研の苦渋と苦心、決断、そして期待のすべてが込

められている内容であった。

さて、第1部は、作曲家、大熊崇子氏を講師に迎え、この大会のために大熊氏によって書き下ろされた混声三部合唱曲『生きる』(詩：谷川俊太郎)

の指導が行われた。この作品の成り立ちにかかわっては、合唱ピースの巻末に作曲者自らが、「…あえて「がんばろう」などというありきたりなメッセージを一切含まない『生きる』をよう

やくテキストとして選択。曲はひたすら元気が出るものを、と自分の気持ちも高めながら創作を開始した」と、その心情を吐露している。

まさに、そうした思いが音楽表現の中に込められ、合唱曲として結実した『生きる』を、作曲者自らが解釈、分析しながら分かりやすく説明する講座は、時間の経過も忘れるほど充実したものとなった。とりわけ、作曲者によって用意されたシートを通した楽曲分析は、たいへん興味深い内容で、新学習指導要領に示された〔共通事項〕等の指導に直面している音楽科教員にとって、示唆に富むものとなったにちがいない。

具体的に紹介すると、五連からなる詩の各連がどういう内容を持ち、どういった言葉が繰り返されているのか(大熊氏はこれを「共通語」と表現)、各連につけられた音楽が練習番号(A～I)ごとにどのような調性のもと、どのような音楽表現や合唱形態の特徴をもっているのかが、作曲者によって明確に提示される。また、各部分ごとのおおまかな強弱がどうなっているのか、リズムパターンや和声などがどうなっているのかについて、さらに、なぜそのように作曲し、どのように表現してほしいのかについて、実に端的で明確な説明と提案が行われたのである。

作品の本質に迫る喜びを味わうとともに、音楽の流れに即した〔共通事項〕の自然な取り扱い方をも学び取ることができた参加者は、たいへん幸運だったといえる。そして、第2部にもう一つの幸運がもたらされた。

それは、第2部の講師である合唱指揮者・指導者の武田雅博氏が、朝から会場で参観されているのを見つけた大熊氏が、作品の中のあるフレーズの歌唱指導を依頼したのである。突然の指名に驚いた様子の武田氏ではあったが、そこはさすがと言うべきで、即興的な

指導にもかかわらず、みごとに生徒たちの歌声を変えてしまった。午前のモデル合唱団の生徒たちは、本来予定されていなかった、エネルギーでイメージ豊かな武田ワールドを経験することができたのである。また、私たち参加者は、作曲家のアプローチとともに合唱のプロによるアプローチも、同時に目の当たりにすることができた。共にその幸運に感謝しなければならない。

第2部は、その武田氏によって平成23年度NHK全国学校音楽コンクールの中学校の部課題曲『証』^{あかし}の指導実践が行われた。午前・午後を通じて、氏のユーモアあふれる、しかし本質を鋭く突いた歌唱指導と、「まず言葉ありき」からの解釈と音楽表現へのアプローチによって、中学生たちの声と表現がどんどん変化していく。その変わる楽しさを、歌っている中学生一人一人が実感できたことは、彼らにとって何物に



大熊崇子先生

も代えがたい貴重な経験となったにちがいない。

仙台市内計9つの中学校から選抜、編成されたモデル合唱団の生徒たち、参加した多くの音楽科教員、そして講師陣が、よりよい音楽表現を求めて共に学び高め合った研修会。ここで交わされた解釈や表現へのアプローチは、合唱や吹奏楽などといったジャンル、あるいは部活動や授業との垣根を越えて、音楽の本質につながるものである。音楽科の授業を核に、学校音楽全体の質を高めていくために、こうした価値あるイベントの輪がいつそう広がっていくことを期待している。

武田雅博先生

